

## 6年「県立図書館の魅力発信しよう」

吉木 寿充

### (1) 1学期の取組

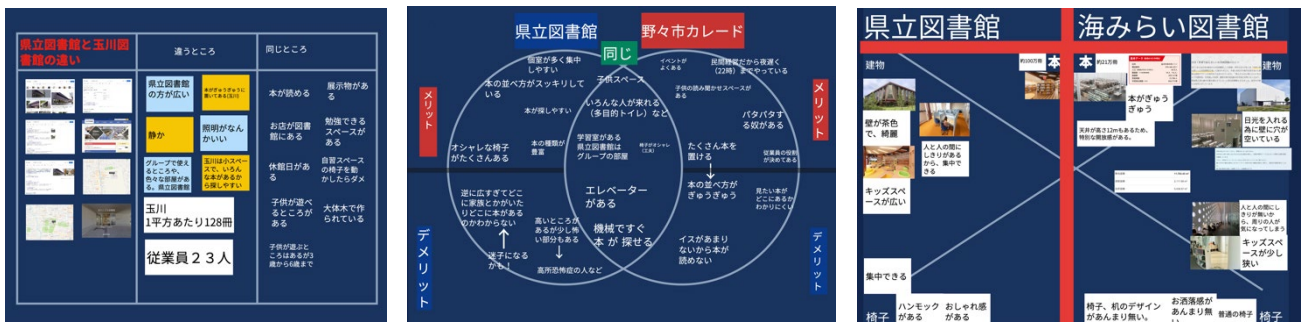
今年度の6年生における総合的な学習の時間は、2022年度に開館した石川県立図書館を題材として進めていく。石川県立図書館は、図書館という公共施設でありながら建築観光としての魅力も備えており、従来の図書館にはない工夫を凝らした施設である。従来の図書館の固定概念を覆すような施作にも果敢にチャレンジしている。子どもにとって身近で魅力的な施設であることから、好奇心を持って粘り強く学習を進めていくことができる題材であると考え。しかし、図書館の課題も多く見えてきている。来館者の減少や本の展示方法の難解さ、観光客の来館数の少なさ…など魅力的な面も多くありながらもまだまだ課題は多い。これらの課題には様々な解決方法のアプローチが考えられる。それぞれの子どもの着眼点で情報を捉え、共有していくことを通して、相手の考えを受け入れて聞く力、自分の思いを分かりやすく伝える力を育むことができる。さらに、適切に情報を収集し、多様な情報の中から特徴を見付け、分析していくことを通して課題を解決していく力を付けられる題材であり、9つの資質・能力の全てが育成できると考えた。

はじめに、石川県立図書館の魅力に着目させていこうと考えた。石川県立図書館や図書館について知らない、行ったことがないという子どもに対して、まずは国語科「公共施設を活用しよう」の単元を足がかりに学習を進めることで、学びの土台を揃えていった。公共施設はどんな目的で活用するのか、また、どんなきまりやマナーがあるのか、経験をもとに予想を交流したり、調べたりする活動を通して、石川県立図書館では「話してもよい、遊ぶスペースがある」などのギャップに目を向けさせていくことができた。ここで「本当にそうなのか？」を確認するために石川県立図書館に見学に行くこととした(資料1)。題材との出会いの際には視点をもたせ、本物に出会うことで子どもの「好奇心」を向上させることができたと考え。



資料1 予想の交流

1学期の学習課題は「石川県立図書館はどんなコンセプトで建てられ運営されているのか」とし、次は情報の収集を行っていくことにした。本当に他の図書館とは違うのかという疑問をもつ子どもが多かった。そこで、他の図書館と比較することとした。図書館という身近な題材だからこそグループに分かれて地域の市立図書館に見学に行くこととした。それぞれの市立図書館と比較することを通して石川県立図書館のコンセプトや運営している職員の方々の思いにも気付くことができた(資料2)。様々な視点で切り取り情報を整理することを通して情報を収集・整理・分析する力の育成につながったと考える。



資料2 小グループでの整理・分析の様子

さらに石川県立図書館の魅力がはっきりしてきたところで、「図書館の3機能」という客観的事実を提示することにした。図書館の3機能とは「貸出・保存・レファレンス」という図書館の中心業務である。この客観的事実と石川県立図書館の魅力を比較させる手だてを講じた。この問いに対して考えることでさらに石川県立図書館のコンセプトが際立ってきた。同時に資料3のA児のふり返りからも分かるようになぜ3機能以外にもこだわっているのかという疑問が生まれさらに深く知りたいという思いをもった子どもが多くいた。この疑問を解決するために図書館の職員の方をお招きし、疑問を解決する場を設けた。このように本物と出合わせることで子どもの好奇心は高まる。それだけではなく、「なぜ？」と深く追求したくなるような問いを与えることがよりその題材にのめり込むきっかけとなることが分かった。

今日の授業で県立図書館は市民の願いや幅広い世代に来てほしいからこだわっているのだなと思いました。また次の授業では館長さんにどうしてたくさん税金を使って作ったのか、どうしてここまでこだわったのかを聞きたいです。

### 資料3 A児のふりかえり

## (2) 2学期の取組

1学期の終わりに石川県立図書館の職員の方のお話「より多くの人に来てもらえるような図書館にしたい」という思いを語ってもらった。この話を受け子どもは「自分たちにもできることがないか」を考え出した。そこで総合の大目標を「より多くの人を県立図書館に呼び込もう」とし、今後の学習を展開していくこととした。学習を展開していく中で「多くの人とは誰なのだろう？」という疑問が生じたため「それぞれが考える呼び込みたい人」を共有する手だてをとった。子どもは個々に観光客や市民、市外の方、外国人など様々な考えをもっていることが分かった。ここで「全ての人をターゲットとするのは難しいのではないか」という考えにまとまりターゲットを絞っていくことにした。意見を収束させる場面では最適解を見出す力を身に付けさせるためにも、聞く力、調整力、伝える力の資質・能力の育成が欠かせないと考えた。しかしこのままでは情報が足りず、根拠のない議論になることも予想された。何度も石川県立図書館に足を運ぶ子どもや、地域の図書館に足を運ぶ子どもはどんな人が多く来ているかという情報がある程度もっている。しかし、図書館に行かない子どもは何も情報がない状態だったため、県立図書館で属性の調査をすることとした。調査の目的を「どんな人が多く来ているのかを調べ、呼び込むターゲットを決めよう」とし、車のナンバー調べ、館内でのインタビュー、入り口でのアンケートなどのチームに分かれることにした。資料4のB児のふり返りからも常に目的に立ち返り、インタビュー項目を考え直そうとする思いが見てとれる。その他のグループでも知りたい情報を知るためのアンケート項目を再考する姿が見られた。目的を共有することでただの見学にならず、調査前の活動も充実することが分かった。さらに調査後の整理・分析を意識して調査することにより、データの傾向を見つけることが容易になったと考える(資料5)。

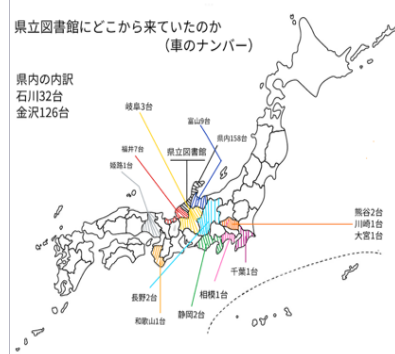
目的に一度戻ってから考えることも大事だなと思った。県立図書館は来た人数しかわからないと知って、他にどんな人や目的で来たかなどを知りたいと思った。次の授業では、具体的にどんなことをどのように聞くのかも一度考え直したいと思う。

### 資料4 B児のふりかえり

調査してきた情報を整理・分析した後に「だれをターゲットにするか」を話し合った際には、国語科「みんなで楽しく過ごすために」の学習を合科的に取り入れながら学習を進めた。国語科でねらう「互い

の立場や意図を明確にしながらかし合い、考えを広げたりまとめたりできる」と合致しており、最適解を生み出すための資質・能力を身に付けられると考えた。図書館で調査した情報をもとにそれぞれが考えをもち、交流することを通して観光客をターゲットにすることが決まり、大目標をより具体的な「観光客を県立図書館に呼び込もう」と変更した。

	西	北	東	合計
石川	17	3	12	32
金沢	76	20	30	126
福井	3	2	2	7
富山	6	1	2	9
岐阜	2	1	0	3
静岡	2	0	0	2



資料5 整理・分析の様子

当初の大目標の設定は図書館の職員の方の思いを汲み取る形で設定したものであったため、「お手伝いをしよう」という思いで活動している子どももいた。だが、「自分たちで設定した」という経験を通して、他人事から自分事へと変容していくきっかけとなったのではないかと考える。このように、共通の成功体験を積むことが探究的な学びのサイクルを回していく原動力になるのではないかと考える。

ここからは実際にどうしたら観光客が来てくれるのかを考え出すこととした。最初はアイデアの出し合いから始めたが、クイズラリーや館内巡りなど、わざわざ県立図書館でやらなくてもよいものや、今まで学んだ県立図書館の魅力が伝わらないものばかりであった。自分たちで「観光客」と設定したものの「私やったら旅行に行つて図書館行かん」「観光客が何を求めているか分からない」という声が挙がった。

口コミなどを調べてはみるものの観光客が石川県の図書館に来てくれるにはどうしたらよいか分からないため、石川県の観光地に調査をしに行くこととした(資料6)。金沢市内の4つの観光地(兼六園・金沢駅・ひがし茶屋街・21世紀美術館)はどうして観光客が来るのか、どんな魅力を求めて観光客が来ているのかを探り、県立図書館に観光客を呼び込むことに生かすことができるのではないかと考えた。実際に観光客の生の声を聞いた情報を整理・分析すると「石川らしさ」「ここにしかない」「モノとモノでコト(体験)」を求めているのではないかと考えるに至り着いた。整理・分析の際にはそれぞれのチームで分析させることも大切だが、チームを解体し、他の観光地に行ったチームとも交流させることで情報の共通点や特徴を見つけやすくなる。今回も他のチームと交流させることで新たな発見があった。このようにグループの編成、交流の工夫も情報の整理・分析の力を高めることができる手だてとして有効であると考えた。

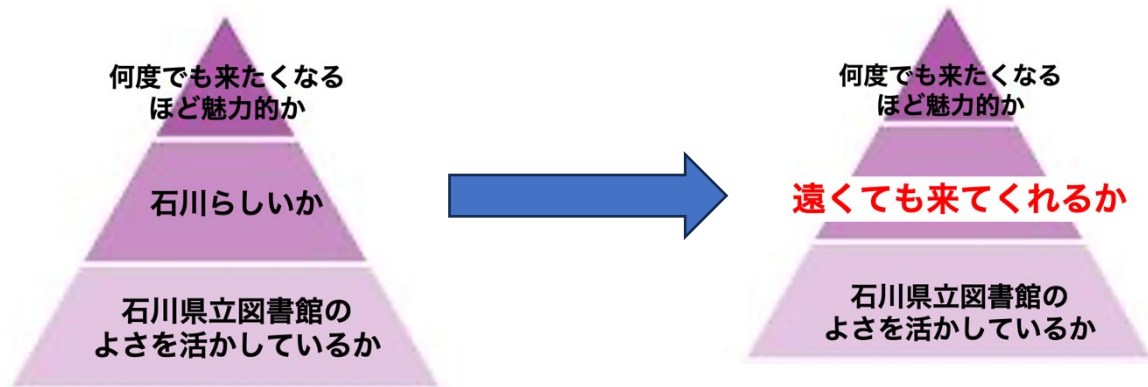


資料6 インタビューの様子

観光客が何を求めているのかをつかんだ子どもはもう一度アイデアを考え出した。アイデアの作成は①アイデアをとにかく出し合う→②条件に沿って整理するという流れで行った。まずはアイデアをたくさん出させることが大切だと考える。それは子どもならではの柔軟な発想を大切にしたいからだ。6年生という発達段階を考慮するとどうしても突飛なアイデアよりも現実的なアイデア、正解を求めにってしまう子どもが多い。「それは無理そうじゃない?」というアイデアが最終的に採用されることもある。しかしアイデアを出し合うだけでは不十分である。そこで条件を設定し、アイデアを整理していくこと

とした。子ども達で合意形成を図りながら三つの条件を設定した（資料7）。

だが、「石川らしいか」という条件は適切ではないという意見が出てきた（資料8）。資料8の※1は観光地の調査を通して石川らしさは大切だと感じてはいるが、自分の経験を交えながら考えを述べている。



資料7 条件の変遷

このように情報の収集をしっかり行うことは、根拠を明確にして伝える力の向上に不可欠であるといえる。グループの考えが全体に広がり、条件を変更することになった。また、資料8の※2の子どもは、石川らしさを私たちが考えていけばよいという前向きな考えをしている。このことから自分たちで考え、時には変更をしながら学習を展開させていくことが「向上心」の育成につながったと考える。

（ロイロノートのアイデアを指差しながら）

C児：石川らしいって条件いる？

D児：いるよ。だって観光地の調査で石川らしさ大事やったやん。

D児：でも石川らしさは兼六園で十分じゃない？

T：どうゆうこと？

C児：石川らしさを求めている人は兼六園とか歴史的な場所に行けばよくて、図書館ならではのか、尖ったアイデアが必要だと思う。例えば、ゲームとかとコラボしたらコアなファンなら遠くても来てくれると思う。※1

D児：なるほど。

E児：たしかに、私たちが考えたことが石川らしさになっていくといいよね。※2

資料8 グループでの話し合いの様子

### （3）今後の展望

大目標「観光客を県立図書館に呼び込もう」の達成に向けて、それぞれにアイデアを考え県立図書館の職員の方に提案をしていく。何度か提案する機会を設けることで、「挑戦心」を育てていきたい。その際に職員の方には、子ども扱いせず、現実的な視点を大切にアドバイスしていただけるよう働きかけていきたい。また、自分のアイデアだけではなく、他のグループのアイデアと交流したり、アドバイスし合ったりする活動を取り入れることで、様々な視点で考えることがよりよいアイデアを作ることに繋がることを実感させていきたい。

今までの学びがどうであったか内容面や学び方の二つの視点でふりかえりを実施したい。探究的な学びをしてきたからこそ身に付いた資質・能力を実感してさせ、次年度の学びにつなげていけるようにしていきたい。